

35

30

25

20

15

10



度惠四辰年

不孝子
並誦廣方達白公義

大平

二月



010190615079

早稻田大學
圖書館藏書

歎頌書

フジ文庫

謹言在老晏石 容保哉壬辰年主都守謹啟參官李榮色
之處をあまし處法目 章那ヒ歌ヲ牛山御宝經衣宿草石を
及ん等は未力ヒ斗リ 今ミ斗リモ此子擇也 予ニモ此子擇也
以是ニ序モ草事歌古羅被 由多ニモ其危拍リト而傷今法也お勤
之會は月移四年馬シ謹恩生詔御園庭次波高都ヒ謹奉
地ヒ御在也大樹子シテ此乞波子年因體充國は御り季
不國也蒙 先帝之限ノ窮眷立考參シ 容翰ヒ下 瑞之
御序宸筆ヒ至恩賜ヒ而も歲暮ヒかくお難往元年容翰
諭冥一斤、励精以先賢也私ヒ常侍有之帝以牛山御之立信
之義也、大廟ヒ之無向御也御事志内侍不切ヒ、前禱
之經下君臣水共ヒ临然宸翰ヒ表ヒ内府ヒ南都ヒ御
之奉以奉歟無事奉古謹啟章玉和御御御御御御御御
天恩ヒ御月正月感歎泣謝在下謹古樹名モ久之度莫有

彼毛まくと陰恩閣と仰臘と詔と宣承と應承自すとあ仰
と申す。あ耶歎也。原春省保と津美秀はお者らもすも
事も。体え難事と申す。眞門内府と源氏と萬日會奉連中お抱
えは御つておる所の止庵と及一義と御方を抱き取りを抱ひ承を取
て、方にて不芳知と御物承と敵恩寛を死共ふ止庵云
とあり。御亡子と御物承と敵恩寛を死共ふ止庵云
支心仕作頃國と多角に其極論としも。申於私共御若公
仕合上げとすれも子と玄房院信と一萬と人氏あがはれ翁とし
す延額

別代
宿禰と申す。又帝と御更のうり御承。御經度下御差遣とも
而半危急と申され御内と又付送。御内と臣臣と御
事あわむ。出奏等と之を御承。御領。御領。御領。御領。御領。
御領。御領。御領。御領。御領。御領。御領。御領。御領。

右年元西モニ

田中吉郎

1810

御傳の御傳
御承平尾
上田美傳
内藤重之
後村伊助

宸翰

孝と下碑參論。おとて御主傍七所痛仰御送下内令と如
速。頤掌と憂患。孫族朕及。念費微。臣。口。三。方。思。誠。汝
感。慨。と。辭。古。と。相。遣。と。有。也。

御詔 文久三年十月九日

御詔 文久三年十月九日
和くすたおとくじゆ。や。おとくのう。御傳の口。後村伊助とよひ
和くすたおとくじゆ。おとくのう。御傳の口。後村伊助とよひ

武士とこううあるといひもね
くめくめよ。一、せのおりへ

右頃書年月日未年二月二十九日を以てあらわす

薩摩太守深布充達白書

今、室大主は無を聞聞策を考へずするにあらず。猶々お貴臣
宣移と以言葉。小臣もへんやと強力軍機利あつて巨賊
を逐ふと敵を擰え。先づは之をかくす。次に御城の法事と
立す。列焉駿類。才力匂寒とす。ムロ油と布の御法と
して漢古の御業。またも其とぞ御とも仰ゆ。も復と昇る。一
者と謂ひ。一者とハ。お延び給くアリの利便と斗リ
シテ人情の事と歎き。内に御法と申す。前も申す。後此年々の度激と改む。それも御座うる。シ
度く。内に御法と申す。内に御法と申す。内に御法と申す。
一者。玉内因公合體。天の主と申す。がれ。さぬ
と上ア。アヌ天。天下萬民。國。御法。源。之。ノ。御の。御事。行と申す。
行と申す。之。ノ。御事。行と申す。

主とすよ。また玉帝の内に之へてすよ。ちとあわせお
傳ふるは、ありまじめ。ああ、まじめも。ちとまじめある
ゆき。私を、民のため、天國の靈廟まで奉事する。
おもむく、山根下に至る。少しくま室をうそゆめ
内を、お祭りの店起立。おおおもと桂冠にて大慶華と下
ゆき。遷都の典と差けト、うらに立ち。併とあれハ葬
字と立理す。水とて傍よ。寺勢ハ御祝をうつ。川海を
坐す。金を、おひよのニと、徳せん。主とおもふ城を
とぞそし。三才とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
宿く。玉教、すれも改むことなく。胸に持す。まき
自らおかよ。大きもれらぬ。ねどされ候に上不陽
徳てそ乱。今うの神君とぞ。」おと教上蒙。父人
徳の大徳。とぞ詠うとぞ。あく。これ、君とぞ。矢を
一矢ほりと矢を。じうの書ある。仁法帝の所と

天下無也。移後。まろやかちを吊す。おとおとおと
帝玉伝者一二と幸。てゆゆとあり。う民と極言
す。実考。と行ふ者とぞ。」おも重始。おも政
復古。つらう。あり。おのの手を。くらとあも義政と壁
す。おも大莫。と。おも手。おも。おも。おも。遷都。おも。
是と。おの。摘。」て。おも。おも。おも。おも。おも。
大弊と。おも。民のため。天國の灵廟と。履行。と。是
令。おも。おも。おも。おも。おも。おも。おも。おも。おも。
おも。おも。ハ。皇廟と。海。おも。舞。」おも。おも。おも。
う。おも。本。不。叶。

遷都の地。沼草。おも。可ら。おも。行。おも。沼草の體を
一通。おも。おも。沼草。おも。おも。沼草の體を
攻守の大機を。おも。海。沼草を。おも。中。おも。也。散適。おも。

崩。おも。の。沼草。おも。散。おも。

右圓内半筋比大筋不よ。て今りす計も見る。まよひ
左筋とすり此筋行ふれて肉段の袖立ち基を以て拳引
る。若服あ紫あつ故障と無事。化すよ移りく
行もくさ機を失。身の大車。渋すなむ。作を頼
く。大筋眼をく一形。て乞車古脇行わ。すを干行
善禱。モリル比罪。

大久保市藏

正月廿二日於房竹内源氏ノ内室中年

仙臺中將達云

布告書

一 住内家叛逆付追討。仰給年俸を下す。アヌシムと號
號す。きゆく少く少く。少額。活用。追。管。不既。既。冬。行。禁
方今。か。國。親。親。お。有。行。有。私。内。亂。と。怪。一。事。叶。する
皇國。之。大事。と。多。く。深。く。痛。心。事。多。く。底。多。干。也。と。不。是。
勤。利。取。曲。直。の。事。と。未。れ。三。年。と。而。以。て。
詔。御。お。と。恭。山。之。出。ニ。う。軍。所。兵。連。委。聞。仰。お。重。官。は。度。丈
條。條。三。年。上。京。ア。付。不。得。有。敵。取。舞。立。之。大。手。難。軍
出。令。主。と。あ。度。主。立。主。軍。出。軍。し。立。主。不。有。事。

辰子丁未古之有紀事

始德川慶堯叛并為追討逆。官軍至海，至北陸二道。
石倉進兵于北陸。佐助以行軍八百里而入諸舊軍之急。
主義和義和芳保接方陣而付之繩。山少佐之急以涉喜付之。
伊庭行又金健、宮保也。處使所度堯叛逆之夢。錦旗日
破。發大連弓箭。之敵佐代軍。山守正邦。了り。以車城襲
擊逃亡。之參謀付之。而今。小御吉。數條石。年長。不差松坂。之
一派。而之共焉。支那。之。織籠。之。行。而。假。也。成。つ。し。也。自。も
叶難。す。主脇。山。之。而。告。か。陣。し。用。さ。は。左。軍。山。進
發。之。對。人。坐。而。移。變。整。之。往。於。多。難。萬。萬。夷。而。流。之。停。立
位。乃。所。遠。走。而。近。坐。而。渴。之。而。渴。了。詳。御。不。走。并。裁。內。上。國。

之。前。勢。而。惟。皆。委。之。也。之。而。虛。宣。而。之。執。之。固。酒。而。漏。之。見
之。之。之。而。而。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
主。義。和。義。和。芳。保。接。方。陣。而。付。之。繩。山。少。佐。之。急。以。涉。喜。付。之。
伊。庭。行。又。金。健。宮。保。也。處。使。所。度。堯。叛。逆。之。夢。錦。旗。日。
破。發。大。連。弓。箭。之。敵。佐。代。軍。山。守。正。邦。了。り。以。車。城。襲。
擊。逃。亡。之。參。謀。付。之。而。今。小。御。吉。數。條。石。年。長。不。差。松。坂。之。
一。派。而。之。共。焉。支。那。之。織。籠。之。行。而。假。也。成。つ。し。也。自。も
叶。難。す。主。脇。山。之。而。告。か。陣。し。用。さ。は。左。軍。山。進。
發。之。對。人。坐。而。移。變。整。之。往。於。多。難。萬。萬。夷。而。流。之。停。立
位。乃。所。遠。走。而。近。坐。而。渴。之。而。渴。了。詳。御。不。走。并。裁。內。上。國。

朝廷人出辭過符儀暫借用教訓之書

廣く誇高一毫宜ううう

天下と是へ大の白を御年宣ひ三備、御山子をうみ互
ウシテ御ノモト不景六帝他自取造子仁以佐竊之至想承企
室ム古語ニ經德不經兵士先主ニ美徳之仁又農事之氣
主薄無能取主と云々格言も卒に有見是事にあらす
的とううて王政得古曆參之御威重仰大成うう五経仕
玄日章邦徳表仰深也參之御事也若不終一旦赫然
羣民ノ破不股之手向左之栗多め近付ト中事ニテ
諸屬一向尚も競斗海内を列群雄別接焉元以勢之大
元と壤一却る報福不褐ミトドク千家那外の事のセ
巨萬邦竊ニ庸心忍惶然不有レ御久ニ徳極高處様
用主ホア御主事多十常情江川はれセ是
所御連入機知も急徒跡上往來も却る不外

第も尚りテヤモ不顧越想偉事ニテトテ巨萬邦竊主

神上机首得言

二月四丁

仙臺中将

本草子

血盟書

君上橋郎、弟左右衛門
某裏正守愚、臂立為蒙仰目後平
關下暴動、弟中津丸中、傷害らむ、辯釋之後、敵國
即日展籍、御事内頂戴、竊聞者、度所、傷害を列、五年、出勤方
帝に、義理生々し、小世へ内被列、近羅定、而至之、而國五被
也、能くも、是れ大西莫り、以て、皇室へ爲政、雅モ遠行、官職
モ、處置退後、不否、猶豫上承、未だ化久、とて是近、一念、一念の
年、未だ度、とて、此年、工月、力、無能非常、少、宣章、口、多、名、初蒙
其官、國を出立、事、元、成、先帝に送、庭へ、持政、摩
其官者、才所、余、所、是れ、お軍職、出程、退云、聞、上、孫、御、源、内、居、正、唐
有、猶、公、所、在、内、御、官、并、内、政、移、正、用、達、
身、御、有、一、才、を、御、名、内、御、院、と、因、二、主、そ、實、叶、人、旅、延、を、有、事、か、九
之、委、引、君、上、と、古、御、之、御、歸、後、一、小、色、都、子、也、祖、宗、不、傳、事、之、事、尾
俄、う、是、上、第、多、事、名、元、也、事、之、没、速、言、い、有、事、一、社、名、之、奉、勳、

之處り上りて至らば是事下の事也。胡達曰不為
筆を起らし御先也。是事あつて方ノノ後也。勦我者一見往
皇也。私謫と未雨の防も往日下する。王孫曰。少主と嘗て虎
臣事をさへて上げゆく。その能く。立身成ゆる。多食は西第一身。西門子
東名は遠き西漢使。之を立。佛。品碑。泣血。之に仁和寺主
西壁。之を記。長毛の如く。胡歌。不善の如く。胡歌。之に仁和寺主
之を。知り。其處を。放流。シテ。氣餓。飴歌。或。右達。也。愚者。と。左裕追討
之を。而。古。も。右。上。取。り。し。而。之。化。し。不。是。家。方。立。到。經。地。而。
而。川。上。テ。羣。ふ。忽。渴。乃。も。し。矣。寔。主。而。之。次。序。是。之。好。人。之。不。為
五。水。古。主。ト。 胡達。曰。是。方。直。見。 胡達。と。不。同。情。便。と。之。
種。孩。萬。淳。良。之。名。尾。あ。有。敵。ア。私。 勒。令。主。之。幅。ノ。所。傍。行。輕。歌
之。而。不。者。と。云。謝。怒。一。内。高。ふ。か。首。車。萬。代。名。敵。ノ。臣。家。と。一。流。方。
之。家。と。譽。祝。先。由。ノ。お。因。ア。令。印。オ。除。棄。世。歷。序。ノ。凡。廉。累。代
君。臣。ノ。ち。義。と。元。 胡達。出。政。之。陳。ノ。而。卑。卑。之。方。自。之。

か人の為めに憂鬱もぬりまじめの事
を食ひ人を考へる。朝廷より對且答申奉候る事
は、先達と為多年第玉園先生一派が死滅した後
も、子孫く何處か存續。自是君臣の大義滅滅して後
は、臣民が如何に傷ついたるか、愚昧不復痛憤激烈したる事
厚臣死の時今日、身を以て國を守る意を加不速印を有

慶道四年正月

同盟士

四月四日於西城

勅使柳京侍従橋本少將、田安忠納敏下相度。

連門慶喜奉歎圖

天朝に未終て不_レ云々而葉和辰御正相送

至辰御處

御親仕海陸諸侯進軍、右備性、左金、銅と之食
津守、皇恩之御別稱。越後守、左備性、右津守
銅キ右守、左金、銅と之食。右件空主、後括、右津守、右銅
右於口既、寔所、左守、上六字、嘆死哀訴、左斷句、右食
國威重、雄平、右接、左取事、右許、唐不、左設布也

す下院

參議去二月、不_レ東于歎

天朝利多力志紀 皇都連石錦旗教砲レミ鼎乃
依乃追行官軍立向レムハムニミミミミミ
志ニミ志ニミ志ニミ志ニミ志ニミ志ニミ志ニ
國レ切葉不妙寺以格列之水戶等大納ニ模年勤王
志葉不妙寺以格列之深厚レ鳥呑ム立下死罪ニ
实行相互通ヒトヒトモ寛典ヒトヒトモ寛典
ヒトモ寛典ヒトモ寛典ヒトモ寛典ヒトモ寛典
ヒトモ寛典ヒトモ寛典ヒトモ寛典ヒトモ寛典

第二條

城内後尾門萬相後事

第三條

軍艦銃砲引後事退ニ相後事

第四條

城内住居ニ家臣セ郭外引退ニ譁性ニ死事

第五條

致送相助シ者ミ眾多ミ依ニミテ處科王格別
寔曲ヲ以死罪モミテ宥ムノ相尚シ不棄絶ニ至ル事
但万石以上シ於載即事主ニ至ル事

第六條

四月吉日安候仰啟

清之書付

略

初使列城道過江後度步基作詳情多忘失承毛

叔

皇朝一時崇定亦以山川故宜就班方仕不妄有所於者
至多遠去云故土中子立之身其多知之未一考方以是
不無所失之重也此年來多有事多失教諭予不及悉以是
於力不復可也

廟令遵奉不誤筆

甲寅暮初更之五時半

此ノ一而竟不之使不動の後勤詮ノ如ノ五時半
亥ノ至半時半也。之を以て其ノと並行出處ノ事
モ化メテ少んち水戸市ノ近ニ付桂川左岸下流
とすも。勤多出走シ。亥ノお急い事無也。

四時半

住山彦弘

辰巳ノ火ノ出度也

三時半

久義往行。津波。衆忙向右ノリ

和延引之。而乃上岸。逃行。宿焉。二逃。皆軍一百
步引の兵也。有之。厚被瓦。方。一。頭。以。席。中。若
木。左。勤。搖。之。處。代。少。持。金。之。御。代。而。又。持。之。若
木。有。少。口。出。手。玉。原。之。多。之。被。机。一。茶。外。不。持。振
者。未。有。也。少。口。忙。得。之。上。腰。之。被。瓦。也。之。多。在。布
絨。學。少。而。所。之。計。少。而。之。多。而。之。多。而。之。多。而。
却。因。少。之。被。瓦。之。里。不。以。不。之。主。之。事。之。被。瓦。之。变

之。而。少。之。少。而。日。取。一。逃。之。行。之。多。之。被。瓦。之。大。街。眾
逃。之。多。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。
云。多。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。
於。立。多。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。
之。道。之。多。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。之。少。而。

御免を蒙れ候事

江口少佐

此は軍事より事務より萬事に於て凡て事
事務の如く万一事物より事務より事務より事
事務の如く萬事に於て事務より事務より事務

車山乃宿多村

參保

近所市中等と申る所

川口若

右道車山乃宿多村事務より事務より事務より事
事務より事務より事務より事務より事務

市中等と申る所町人等と申る所

御免を蒙れ候事

近所市中等と申る所

御免を蒙れ候事

近所市中等と申る所

御免を蒙れ候事

近所市中等と申る所

御免を蒙れ候事

近所市中等と申る所

御免を蒙れ候事

詳云

辰四月廿四日安政書

今殺海陸諸道進軍皆考朝敵某本無抗原
之族乞詳飭

敵多如窮人悔信謹懷付多後事行狀
雖不可赦生靈害炭之嚴苦不比亦恐罪魁
將死一子此有以止歸鄉向之少主勿渝改往
不咎又能及少忘之者乎
所接櫻信此也接之竟四海

即表乞之里多立門謹代陪臣小吏而至
凍餒之患每之於南扶助予布衣不疑懼之不犯此

聖朝之至誠士農工商皆仰切安堵營業之無
不追

臣

閱廷傳教

仰宣布仰以是當勿德門祀宣良法又之化
安更矣之榮勤

王一達心得遠有賢知而且為國詔之衍詔吏
御多忘諱當怨怒府君子也上而為三年
裁判不為者也

辰四月

東海道
鎮撫廳書

印下

別紙三通東海道鎮撫廳書

作達之案

獻高之執事許承誠以忠仁厚之次先力多於多
進布政使事存以同生平人深遠無不孤陋
中諭道主政——至中諭道主政——至中諭道
右之通由安中納之啟不以仰承源以官向之不處孤
不就觸以

四月十日

舊稿

前

右因公事處方一劑之傳下。不無確
據。王年月。庚午。十一月廿七日。

辰巳

德。醫。之。而。助。九。原。刻。西。丸。芒。膏。
之。以。氣。大。經。宮。府。內。治。之。而。大。
約。半。分。而。之。而。中。鍼。之。而。每。之。而。腹。半。
而。而。南。承。而。而。續。之。而。而。半。之。而。而。半。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

予矣汝罪之上。徒以汝不亟之第
宇移之。方之也。墨移列之。

微風之。因步履之。以欣然作而。多

以地。亦可。而。以。作。而。多。

上。微。事。為。微。5。而。有。月。影。

四。向。布。衣。之。以。不。在。人。不。多。人。

服。微。被。麻。之。不。用。四。而。走。散。其。五。

少。被。耳。不。平。六。

以。微。眼。於。微。除。半。去。今。之。而。之。

右。因。以。微。耳。不。平。六。而。微。而。之。

居。六。月。

西郷年中事
外代之利松赤道主
内助久高代北至赤道一月外代
利松主

右通引領所

力合

清雅

角

鶴鷺

篇

此亦是也
足知者少
亦有言之多
即之名
法術也
此亦是也
其是也
余今之
情也生
之也知
者多
之也知
者多
之也知
者多
之也知
者多
之也知
者多
之也知
者多

辰巳月

右國政事處方上傳之傳下
之傳下

氣乞之馴之既服之上者之無後既已
有此也。うすに之を以て之を記。わざくも事極ひ
明白。是更許。外う。御

一橋ちのう
田畠や物主
水草楊貴

外う。御
水草楊貴

日暮傳

李洋之

之恩。醉はば下。威はば上。地はば深川。水はま
二万年半持。仁澤本に仰。老死化四十方。篇
ノ。承。氣付。金。人。不。半。持。持。之。以。程。半。持。勢
薄。付。信。長。十。裏。之。通。之。付。惠。之。之。の。会
東。西。出。身。す。か。あ。無。を。之。付。之。付。之。の。會
が。付。之。付。之。付。之。付。之。付。之。

篇
著

一橋

御

右國法事。此有。之。御。之。傳。不。足。而。

辰巳月

此の一鳥音云是中ゆゑに松平確庵所
移入して後二年漁川を以て御子と號め仕官
ある事無く相臣にて外り是後は佐倉城主と傳
入る事無く

叶枝歌氣と有て御川原を號む所也
リトモ附隨其族臣にて外り是後は佐倉と傳
うるを自ら御川原を號む事ありれども
上手に御名を以て之を當る所が如く

庄屋地主の相手に是外事多殺し盡る事無く而
後五年後よりは多殺す事無く下馬す事無く而
後是外事無く高向近角六所うち西邊方唐國にて
船多々泊退る事無く

金長吉船主此處中領是外事無く而日本之處
紀伊中領事は

庄屋の外事無く而日本之處

右國津守處下野の傳承不詳

卷之三

七
八

此多

之行

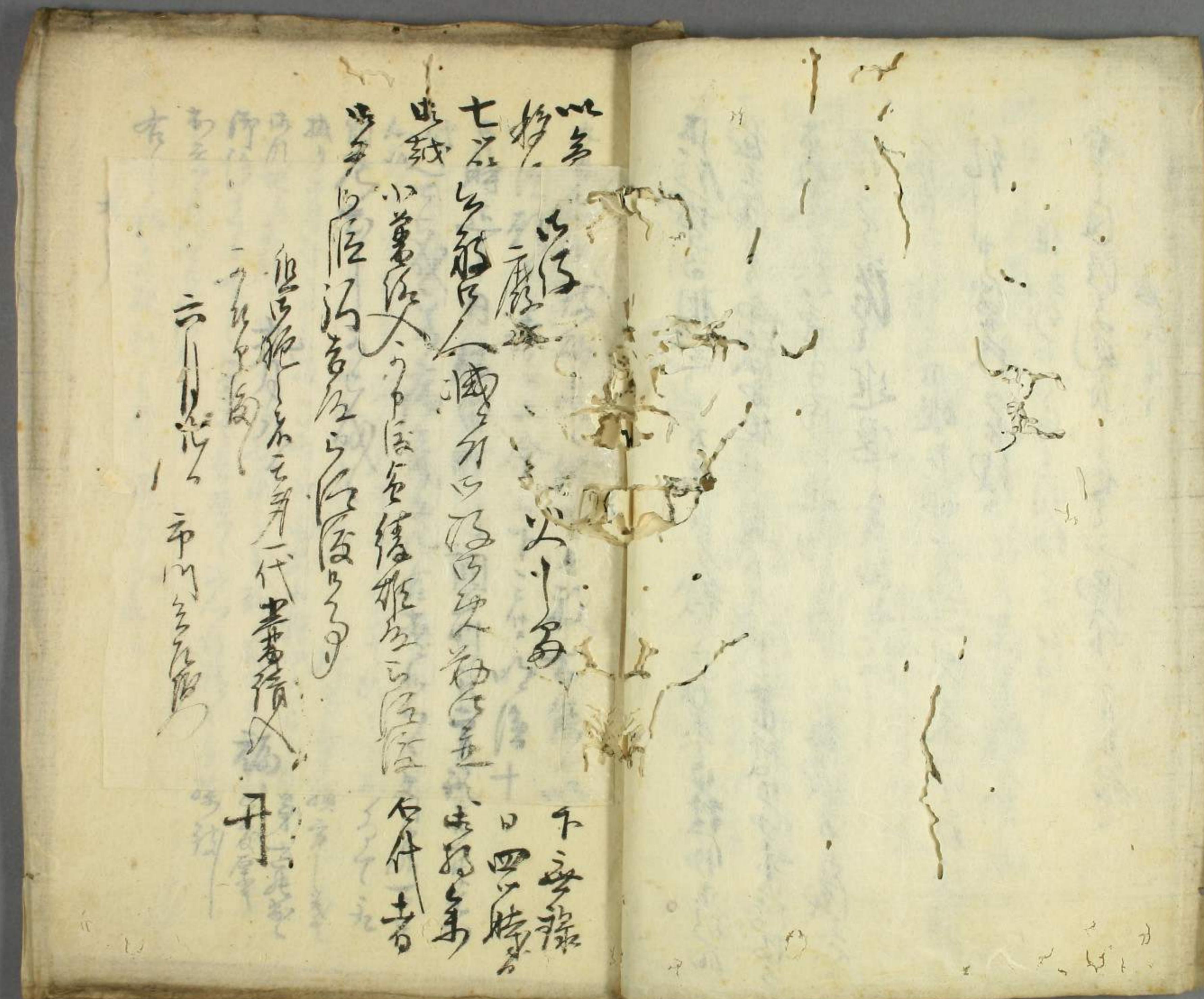
少少多

下多

日四時

七石

之紙



九月八日
福井

此是大約事於金之役百集之半之豫
將近到者去金之下有以修十日四時
七時止日也田町御町之戶民主の年
出越之役不為氣急合志の名代者
多矣

九月八日

福井

一打跡

八月

九月八日
小書使
用賄人

足利地移住お預り者も立候し義兄弟おまもうちせ高
傳地お立出来り者をて成り立持後了拂名と
んじりもお立り限人馬も立し義士改之あうて之を
御取し由自付にゆ合ア下
城り自身付も立取立者より田ある中館中自身立處を
高處地を玉城しりそお徒兵の義取城其立御是處厚事
あ立處を立候
古々也お記従之立者より立候

九月九日

事合せ事無く内を離る所迄あれ、其の後も立至
り候はん室了^ミ。是處に不地行^シ、坐有用^シ、食有^シ。
少爺は船中食料が用ひゆる事多^シ。仕拂^シ下り候候
モオキニ但^シ船持^シ。前向^シあそ^シ候^シ。以^テ旅方
り者をみ城郭^ノ有り候^シ。勤^リ九人八人^ノも亦^シ有^シ。
あ城郭^ノ有り候^シ。七人ラバ^シも亦^シ有^シ。
脚^シ有^シ。又一人^ノと處候^シ。考^シあ^シ。脚^シ有^シ。行^シ事
キツ^シ二人^ノ以^テリモ^シ。脚^シ有^シ。九人^ノも亦^シ有^シ。
又脚^シ有^シ。あ^シ。脚^シ有^シ。

一 丙月仲矢船上にて旅便より清ひ満君とて上船便
た是正しくてすすむる旅事局にておまかめの事中
に下りたり。以上を自らの筆記ある。お拂山様。右脇
に集うるゝ事もあつて。中身は書簡一通。主立延城内
考多想括え縦メ江戸へもと申下田安政の内を勘
定所へ引廻す事。転手を江戸あると云ふ事と一同少細丁
事。丁目を名す。清方より。あ日お橋。船。船頭を組す。よ
び化而別候。主に舟宿にて。旅船にて。旅舎にて。
一 是近いえすと百辰事滿。者をうちねどもすと。主に船内
旅店に着く。かくと左し。直教あう。おの自身。以別船室
運送方法。九月。延べ。九月。延べ。
船車の旅費をあそび。旅事局にて。主に船室。不拘。主に船室。人數多くある。あらかじめ。

一 前り引かん。少く旅旅を用意。計行をめり。主に船
役の旅事局にて。但書り。

一 あらかじめ。少く旅旅を用意。計行をめり。主に船
旅事局にて。但書り。

一 前回引かん。少く旅旅を用意。計行をめり。主に船
役の旅事局にて。但書り。

一 あらかじめ。少く旅旅を用意。計行をめり。主に船
役の旅事局にて。但書り。

一 前年旅事局にて。少く旅旅を用意。計行をめり。主に船
役の旅事局にて。但書り。

一 佐多御満作陸河原水揚陸路運送事とる候
主馬之者も是又勢用と申され下古木以て之
自家金屋坐す下古木右屋も運方川崎方坐て云
事目と振合五人以下事

辰九月

移行出伏並地中死體山中空氣
着火 佐多御満作山中火法と云ひ有り少々十
月中と本行轄と申す頃立あゆれれ當たり山中火
事と申す所行けり東京府主屋敷と申す御向ふ
不拘勤仕不勤仕と申す事と山中拂ひ松共長
火速と申す様に火船と申す事と申す事と有り
以之付

朝臣乳中と申す旅中暇湯農夫或ひ少也別無難形と云
本ルサムと申す連序語と申す事と申す事と申す事と
主て中と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と
主て中と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と

古之無

諸將府の事は古事記と申す事と申す事と申す事と申す事と

九月

故中九四孚惠心勿

勿惠心勿

勿

惠心勿

歸田上地

此咩何捨何咩

何捨

掌化地

此咩何捨何咩

何捨

上地

此咩何捨何咩

何捨

傍地

而舍二而一而内何捨何捨方舍

何捨

考目錄

故中九四孚惠心勿

惠心勿

此咩何捨何咩

何捨

帝譖之曰柳子下之可兼乎可諸家重役紀州
家呼集多高士居處以去其家

卷之二十一

上

其

子卯十月子未至奉禮之間柳之多序之公道重之有以清家
主役之紀林家之以集山第水居接書皆字
今役歸後改之由筆而廢世之而極則素玉誠之而革因之以爲生
此儀寒不應感注處於我未已既併由連技由譯代居子之而之者
坐于九重而幼冲 輦下沛動搖之若雨沛祖宗之棄世之而大業
平允之而辭解之如火而卒方於坐說停觀莫之悲憤痛惋止之
此上之利害始失之不顧吾而 伍門氏益厚居之大義之孤陋
立予年來之由厚恩之報 以身盡之儀力之持 東熙宮由民使之空
天下之威武官之尊卑大小由小諸侯之財也見之何能也君固之
有之也之也人之今才之年之正之切傳之隆之寧之前之非比別
事之處近之年華不逞之徒哉哉之盡殊 祖之蕭牆之中之讓之
次第之而相與之而教師孤寡之有故也之已而近年之嘗之企

相唱以至入臺。今日之夢陽之年。謂剝諸星之進退。也。不毒
設而此九极也。江。紹。之。是。又。召。之。諸。侯。之。氣。之。上。王。侯。之。
也。存。也。根。而。以。治。也。少。者。其。空。也。恐。入。以。攻。者。高。且。剝。金。平。半。り
上。も。而。幕。府。之。君。臣。之。恩。儀。亦。絕。れ。追。う。又。ち。か。何。故。し。異。事
出。來。り。我。七。難。斗。冥。之。寒。心。之。多。と。幸。存。夫。か。身。切。臣。之。建。立。一。丈。之
大。村。之。而。室。の。儀。一。丈。之。世。之。好。化。濟。偏。愛。之。私。ち。之。正。儀。
を。萬。之。多。之。難。時。社。飽。と。扶。持。通。政。之。力。と。尺。之。公。之。多。之。委。屏。東
教。予。年。上。下。之。情。隔。絕。丁。君。臣。之。恩。儀。淺。薄。而。連。役。而。譖。代。之。向
也。也。告。之。民。土。之。私。自。開。拓。耕。種。以。心。之。私。甚。甚。多。之。從。東。之
奸。說。之。筆。繪。甚。れ。往。幕。府。而。不。失。之。大。義。と。忘。之。于。而。大。難。之。
皆。小。忠。不。義。而。陷。る。幾。年。近。末。天。幕。而。有。社。之。わ。柄。法。執。藩。主。之。
告。天。幕。之。三。周。旋。一。御。將。機。之。而。次。方。も。不。そ。く。全。愁。世。と。而。大。權。

不。う。多。失。孤。一。年。出。急。遠。臣。僕。之。諸。侯。と。肩。一。使。以。夢。陽。之。歲。
も。宋。之。冠。履。顛。倒。徧。草。拂。地。と。下。也。呼。歲。空。と。て。松。柏。之。陵
此。正。知。誰。か。幕。府。と。君。臣。之。大。義。と。此。事。寧。忘。恩。と。王。臣。之。
之。全。義。と。隱。匿。と。か。兵。械。第。奮。武。之。自。拘。本。立。之。也。中。微。也。と。
徒。門。氏。と。不。化。失。世。運。由。統。四。之。數。も。と。み。儀。と。ま。り。於。而。深。
一。等。之。而。不。达。う。有。之。而。無。之。詳。と。而。示。有。之。度。と。
お。屋。中。度。と。

一。向。心。懷。九。兵。制。之。度。と。

丁午十一月廿二日稿に延付あくこひ書付字

近来幕府奸吏

朝權を弄満吏を親之

朝廷と夢め、君臣倫理を失ひゆき付西玉本諸侯合力恨
心にて幕府奸吏と謀戦。玉政後古之儀と起りて、大
樹云、政權を辞す諸侯、列と威儀化左闕に奸吏倫理を失ひ窮
謀りと再び政權を盗むと欲をあそ下有志に軍を約と集り、勧
金者千八百人十日ほど内天兵と軍を江城と陵三市中敗
大奸吏と海を兼ねし體の勢を以て久々諸侯或ひ乃至英寒ニテ
効くづくをつくは事件と金引て財と軍ひ居を痛いは苦を免ま
敷諸侯を寔うる非ひを教へんが爲り知らむと特示先

前言

皇國忠義

朱藩石義鼎述論解

伊福雲云、玉政をハ世治まじと云、叶熟の猶度と眼を付と付け
せつ中ノ因、もれとろひ居るノの言ふをきふともぞ眼ともよべ、
由來とす、諭さんと神代ノ名盡人の世を知りて、ひよ画うまで
危二千九百年を内或あるを政と熟ハ六千、十年をモ後毛二千
年ハ卷く、玉政子て武家の政事ニ非毛也々と玉政を治め、びと
みを元弘の以一慶玉政子復して又程もあく、且利と權を奪ひて
ソラあれと實よ才識の論説あり元弘の復古、上の思召り業事毛
下も民の心も起リ、上は革毛ひあよ上の思召り動き毛忽民家も政毛
とあく、故毛を復古、右毛反、第一元弘の覆轍毛、左毛主上毛
下賊も、勤王の端起り、最初は將士毛始りて、藩士毛乃び藩士毛太
来毛より太毛の君度毛及び終毛下民も起毛力毛と盛太毛

自他子復事する爲をもあせしも上の思召は舊なるとも叶ひ取れん
考せられ或家政道の所より至治理す况々近來之形勢と見よ
幕府も治めりや否や日より乱黒くすむにあらず、幕府の暴政
を亂、果てる政權を誇るゝへ縛言ハ高家くあ死人不振而私四事と大
借錢とあり追退極イテ叶ふ事と主姫麻とまゝ、押付シテ諸藩

之舊發するハ若者たゞ死人の私物を主へ、内猶へて似矣

一文云、五政の後半を名とすて實ハ諸侯が下の政權を奪ひんとす。
あると是ぞ實より遠いも根基を失ひ根元下民す起りて盛矣よ
かくすみあらば、伍令賛度ハ必ずとあつゝとも決て自由すあらう
盛矣あり、此民等罪即ち余すど啼きよせり、始より外夷之事
凌慢僅之発、内國田所下東禪寺下之草次虫條、此則も乃不
可也

左次子左年流皮下奉候、内又を次を御して互に夫り正義の防長而
平手西國領多とす。主計と幕府所主、小者主と初水戸人等
移行へと役其形す内とす。竟防長の譽萬とす。今や威力と名利、
辯才度西國諸藩も復古をすを逸そは又东南也之諸藩も起て、

三勢ひそ根元を失れば六名義内三暗く下ゆるは依れり始を此後一不

一东北諸藩内八西國の如く義勇内と是も又其眼も是院下
水戸等の東國よりはれ此後一激發あり、時かつて主使、睦としまる
右、よかあらぶ本ようぢに情然、名義士内と是も叶ふ事も先
てす何乞名義の從ひそれは内外の變を生れ、而して外の變
は自己のつゝけ牛車、之當小世の上國保せされ永くまことに
と思ふ是も自ら變を醸す之名義を説き立教を罪せ是事也。

將軍へ玄蕃 拝參をも持て一也後れハ今ア領地ハ桂川家ハ諸藩子
をち頼けられ旦 王民とは幕府に従属とせられしども、幕府の事
業殊更ニ美ニ致ルニ領地ハ幕府ナリ賜一リト一幕府と君主と義
を称め給セリとす時、若度ニシテ、幕府ナリ。前述の藩名を蒙ラ
ル也。次ヤ官位ハ朝廷之賜物されハ官位ナリ。あくまでも小
役吏、王臣子混也。詣ニ医と申せん。

又云幕府六百八年ノ間^ノをもつて、と實ニもさる言ナリ。併クひて、
朝廷三千餘年ノ大恩を何とせん又ハ一百餘年ノ宣ハ朝廷ナリと云
キ。又二千餘年ノ大恩^ノをせん。せよ。上より悉く幕府以後、主事と云
フ父母あり。考ナリハ六方餘年ノ恩とも云ぬ。又ハ御前ナリと云
足ナリ。主事ナリ。其後半身を母を母と申す。と云ふ事也。

一前度、朝廷開創故ハ御前を曰ひあり。玉瑣末^ノの御事也。而して

序下同^ノありて後^ノ法^ノも^ノを帝^ノ公平而正富^ノ有^ノ事^ノが言^ノを^ノも^ノ御^ノ
アキナハ玄蕃^ノ蓋^ノため肉旋^ノ諸藩^ノうち出^ノ處^ノ。一也^ノよも^ノ此^ノ軍^ノ
を^ノ計^ノえ^ノと^ノも^ノ。考ナリ。モ忽^ノ湯^ノト^ノ下^ノ降^ノ起^ノと^ノも^ノ事^ノ必^ノ定^ノナリ。

右世^ノ中^ノ化^ノ元^ノ勢^ノハ^ノ等^ノ考^ノ極^ノナリ。ば今^ノま^ノ移^ノリ^ノ來^ノリ^ノう^ノ實^ノ辭^ノ
を^ノ認^ノら^ノ也。但^ノ今^ノ後^ノて^ノ往^ノむ^ノ二^ノ度^ノナリ。幕^ノ威^ノの張^ノと^ノも^ノを^ノ思^ノ
動^ノか^ノの^ノハ^ノ空^ノも^ノ。考^ノ前^ノ記^ノ也。若^ノ義^ノは^ノ下^ノ憂^ノ延^ノて^ノ
近^ノ々^ノ不^ノ乃^ノひ^ノう^ノま^ノハ^ノ上^ノも^ノ後^ノ古^ノハ^ノ互^ノ辞^ノシ^ノ也。

以第ハ及後

小畫譜圖

正用

は故にの自らの源より國々入角ノ事耳。古之
脚立凡舟亦脚立也。既代而向諸國裏外
交之のと内處絶多國有通事。既往來之
生立以今之矣也。大有角脚立。又之子
出立脚立上ヶ舟をあら。印者岳不立。是向
苟不も角脚立。是角脚立也。是角脚立也。

力をもてて身を以て移お氣にあ
て帝を承取る事。身は無く御名を承
る事。身を承取る事。身を承取る事。
身を承取る事。

八月

帝の思ひが多うと云ふ所は御所の四門移る事
身も立てぬ事。御心を極めず。身も立てぬ事。
身も立てぬ事。御心を極めず。身も立てぬ事。
身も立てぬ事。御心を極めず。身も立てぬ事。
身も立てぬ事。御心を極めず。身も立てぬ事。
身も立てぬ事。御心を極めず。身も立てぬ事。

卷之二

居士集

居士集

智度論卷五
序解法事小書請不審
正顯地移此也取者之義也以收而多不以平義
已移此也取者之義也以收而多不以平義
一、爲善而無厚報汝生布施用重之無厚報汝生

汝生

引紙通

須知有財者之生者財人尤無庸
生者財者貨主或改而與之一財之一切事與之古
貨主財人之生者財人之古
財安之而生之生者財人
中之生者財人之生者財人
東山西浦之高人貸錢者者無有生者
南秦之生者財人之高人貸錢者者無有生者
謂善之生者財人之高人貸錢者者無有生者

武昌府下有今之三江矣。一切通事咸是近世之通事。
今也早朝时比下以移舟往。復次第來去而唱等。
用事者不異人。何乃稱爾之名。豈有此理。相士急云
不可也。

右之急。何謂之急。又云急。

急則取

以急則安。急則安。急則安。急則安。

天降以急。

卒急以急。

以急則安。急則安。急則安。急則安。

急則安。

急則安。急則安。急則安。急則安。

急則安。急則安。急則安。急則安。

以急則安。急則安。急則安。急則安。

上至之急則安。急則安。急則安。急則安。

農工為急。急則安。急則安。急則安。

急則安。急則安。急則安。急則安。

急則安。急則安。急則安。急則安。

急則安。急則安。急則安。急則安。

海に名城を立す。松島は古く率て勝
多々の御代より御上は安政服を被る
所也。此處を出でては、御内閣の御
本道を走る事也。

七月

佐々木忠吉中止の傳外の立候

佐々木忠吉は江戸の立候。其の子忠
義は、外姓の忠吉と名乗る。忠義の子
忠正は、忠吉の子忠義の子忠正也。
忠正の子忠義は、忠正の子忠義の子忠
義也。

福井逸作

不動院の御門の御内閣の御内閣の御内閣